

『蜻蛉日記』の物語での記の分析

—— 作者の意識の変遷を中心として ——

藤 本 徳 明

はじめに

『蜻蛉日記』には、数多くの社寺参詣の記事——つまり、物語での記が録されている。これらが、この作品の中で占める文学的意味の大きさについては、『蜻蛉日記』の、最初の本格的注釈書ともいえるべき『かげろふの日記解環』の中で、坂徴が、すでに「其中（蜻蛉日記の中——引用者注。以下同様）ニ紀行（社寺への）トミツベキモノアマタアリ。……皆目テ刮テ観ルベク握玩スベキニ堪タルモノナリ」としている所であり、爾後のおびただしい研究書においても、先の評価については異論がないところであると思われる。

この『蜻蛉日記』は、上、中、下の三巻から成り立っている。このことの意味についても、すでに様々な論があるが、たとえば、岡一男氏が『道綱母』等の著作の中で、上巻は歌物語的で序分にあたり、中巻は日記的で正宗分にあたり、下巻は物語的で流通分にあたる、とそれぞれの性格規定を試みられているように、これら三つの巻の性格に、著しい差異のあることについては、これまた、諸家の意見は、おおむね一致しているところである。

私は、先述した、二つの事実を前提として、『蜻蛉日記』に関して次のような考察を試みたいと考える。

すなわち、『蜻蛉日記』において重要な意味を占め、かつ、多く

の記述を有する物語での記を、上、中、下巻に区分した上で、様々な角度から分析してみたい。そして、そのことを通じて、『蜻蛉日記』作者道綱母の、意識の変遷を、私なりにあとづけ、あわせて、『蜻蛉日記』の内面的構造についても、考察を及ぼしてみたいと思っている次第である。

一

まず、『蜻蛉日記』に表われた作者の物語での記事を、次にすべて表示してみる。（ただし、Aは物語での番号、Bは底本たる角川文庫本の所在頁数、Cは、物語でのなされた年の西暦年、Dは物語で先、Eは底本で記述が1頁以上あるものの、各延べ頁数である。）（注1）

	上巻	A	B	C	D	E
①	一八		九五四		寺？	
②	二三		九五五		寺？	
③	五〇		九六二		山寺	
④	五一		九六三		賀茂	
⑤	五四		九六四		山寺	4
⑥	六〇		九六五		山寺	
⑦	六八		九六六		賀茂	
⑧	七二		九六六		稲荷	

	中巻	下巻
⑨	七三	九六六
⑩	八二	九六八
⑪	八八	九六八
⑫	一一一	九七〇
⑬	一一〇	九七〇
⑭	一二八	九七〇
⑮	一四一	九七一
⑯	一七〇	九七一
⑰	一九九	九七二
⑱	二〇一	九七二
⑲	二〇二	九七二
⑳	二〇五	九七二
㉑	二〇六	九七二
㉒	二二六	九七二
㉓	二二〇	九七三
㉔	二二九	九七四
㉕	二二九	九七四
㉖	一三一	九七四
㉗	一四七	九七四
㉘	二六〇	九七四

右の表からだけでも、次のような事柄を指摘することができる。

第一に、一つ一つの物詣の記述量に、上、中、下巻では、それぞれ著しい差が見られることである。

前表を総合すると、物詣で回数、上は11回、中は5回、下は12回となるが、それぞれの記述頁数は（およその傾向を知ることが目的

なので、1頁未満も1頁として算えても）上は19頁、中は40頁、下は12頁と概算できる。したがって、一つの物詣での平均記述頁数は、上は2頁以下、中は約8頁、下は1頁以下となる。上、下の1頁と算えた部分は、前記したように、実質半頁程度のものも多いから、より精密な計算を試みるならば、中巻と、上、下巻の平均記述量の差は、さらに大きいものとなるはずである。

第二に、前述のこととも関連するが、各巻全体に占める物詣での記事の割合にも、各巻それぞれに著しい差があることである。

物詣の全記事量を、前表に従って概算し、これを各巻の頁数（底本では、上は76頁、中は92頁、下は86頁）で除するならば、上巻では全体の中での物詣での記事は25%以下、中巻では約43%、下巻では、14%以下という数字が出、ここでも、中巻物詣での記事の割合が、他の巻より大きいことを知ることができる。

つまり、少くとも物詣での記に関する限り、中巻、上巻、下巻の順でその記述量が豊富であることは明言できるのだが、その順位は、各巻全体の、文学的充実度にも比例していそうであることを、先に引用した、岡一男氏の、中巻が、上の序分、下の流通分に対する正宗分であるとされた性格規定などにも関わって、推測できそうに、私には思われるのである。

なお、前表の、各物詣での記述頁数から見ても、中の⑫⑬⑭⑮と、上の⑩とが、重要な物詣での記であることも確かであり、以下の分析においても、それを考慮した上で言及がなされることとなるであろう。

先にふれたような、物詣での記にみる各巻の量的差異が、それぞれの質的差異とどう関わっているかを、物詣での記述自体に即して以下分析してゆきたい。

最初に、各物詣での動機について、『蜻蛉日記』の記す所をとりあげてみる。

(上巻) ①②は、注記したように、物詣でと明言はされていないが一応山寺詣でと解して扱ってゆきたい。①も②も動機は分明でないが前後の事情から、共に物忌みのためと推測される。③は「悩ましうて」「加持も試みむ」とあり、病氣治療のため。④は脱文があつて詳細は不明だが「物見」との語句がある。⑤は母の葬い、⑥はその一周忌である。⑦は「祭、見に出でたれば」とあり、⑧は「世の中をかしからむ。物へ詣でせばや」とあり、共に見物が主目的だが、⑧は副目的として、「かうものはかなき身の上も申さむ」ともつけ加えている。

⑨は⑧と同じ月に「同じやうにて」とあるので動機も同様であろう。⑩だけが「年ごろ願あるを、いかで初瀬にと思ひ立つ」と、心の内なる「願」が、主要な動機として記されている。⑪の動機も「物見」と見なされる。すなわち、上巻の物詣での大部分が、実用的、外発的とも言える動機に由来しており、内発的動機が支配的なのは⑩だけだと言つてよいことに注目しておきたいのである。

(中巻) ⑫⑬⑭⑮⑯の物詣での動機は、上巻のそれと異なり、一括して内発的な動機、それも、兼家への反撥に由来していると言えそうである。なお、これには、上巻で唯一つ性格の異なつていた、また、記述

量も最も多かった⑩の物詣でのそれも含まれることは前述した。

⑩の動機をもう少し掘り下げるならば、作者のライバル時姫の所から、「女御代出で立たるべし」と夫に言われ、おそらくそれへの反撥から、「わが方のことにしあらねば」と作者は出発したのであつた。

⑫の動機は、「かくながら(兼家が来ぬまま)引用者注。以下同じ)二十余日にたりぬる心ち、せむ方知らず、あやしく、おき所なきを、いかで、涼しき方もやあると、心ものべがてら」とあるように、避暑の目的もあつたが、それ以上に、孤閨の煩悶が作者を外へ駆り立てたといえる。⑬も「明くればいひ、暮るれば嘆きて、さらば、いと暑き程なりとも、げにさいひてのみやはと思ひ立ちて」と、⑫と異なつて暑さをおしてまで出ようとしたのは、やはりつれない夫への悩みのゆえに他ならなかつた。⑮は、前段で兼家への書簡に「今まで世に侍る身の怠りなれば、さらに聞えず」と出家を仄めかしたあと、ただちに「かくだに(兼家のつれなさを)思ひ出づるも、むつかしく、(里住みをしていると)さきのやうに悔しきこともこそあれ、なほしばし身を避りなむ」と、家を出たのであり、物詣でというより、出家に近い行動であり、それゆえに経過も複雑となり、記述量も格段に増大したものと思われる。⑯の動機は明らかでないが、参詣の途次に、「あれ、わが心と詣でし度、かへさに、あなたの院にぞ行き帰りせし、ここになりけり」と、前述の⑩の、同じ初瀬への参詣を回想していることから、⑩のそれと動機が関連することはまちがいない。⑩で、兼家に反撥し、家を出た彼女を、兼家はそのとき、やさしく迎えた。しかし、彼女の家出ともつかぬ物詣でが重なるうちに、兼家は、もはやその手には乗らなくなったのだ。さきの感慨は、そうした両者の関係の

変貌を示唆して象徴的だといえる。⑯の物語では、ついに兼家は登場しない。これは、下巻の物語での世界を予告する現象ともみられることである。

なお、これまでことさら言及を留保した⑭の物語では、「大嘗会」で「物見る棧敷とて、渡り、見」たものであった。中巻唯一の、内発的でない動機による物語である。これの記述が文庫本で5行程度にとどまっていることは、中巻の他の物語での記述量の大きさと対照的であり、動機の内発的な物語での記述量は、外発的なそれは小という両者の相関関係を暗示しているといえそうである。

(下巻) この巻の物語での数は多いが、それぞれの記述量は乏しくしかも大半の動機は外発的、消極的であることは、先の推測を裏付けるものとして注目されることである。

⑰は、「忍びてもろともに」と人に誘われたものであり、⑱も「忍びて」出、子どもらに「いかで物見む」といわれ、また出直している。⑲も「忍びてまじ」ったもの、⑳も「忍びてさそ」われたもの、㉑も「人にひかれて」、㉒も「いざなはるれば」であり、㉓も「つれづれなるを」と出たもの、㉔も「さそふ人」あつての物語であった。㉕には動機がかかれず、㉖は「忍びて思ひ立つ」と若干色彩が異なるが、㉗は「同じ所なる人」が詣でたのに伴ったのであった。末尾の㉘は、子道綱の晴れ姿を見んがため「いかがは見ざらむ」と積極的な印象的だが、こうした一、二の例外を除いては、一般的に、他動的、微温的な動機が支配的であるといえる。こうした事実にも、下巻における作者の精神世界の相貌の一端を窺うことはできると思われるのである。

三

『蜻蛉日記』はいうまでもなく、作者道綱母が、夫兼家に対して、愛を求めつづけた生の記録ともいうべきものである。したがって、先のおびただしい道綱母の物語で対して、兼家がどのような態度を示してきたか、また、その物語によって、兼家への意識はどういう変化を示したかをあとづけてみることは、『蜻蛉日記』の主題と、これら物語での記とが、どう関わってきたかを追跡することでもありうるだろう。

(上巻) ①の場合、新婚早々ということもあるが、「旅なる所」にいる作者を兼家は追うてそこに泊っているし、②でも他出した彼女に「鳴く声きかば尋ぬばかりぞ」と愛情こめた歌を送っている。③の山寺詣では兼家と同伴であり、④のみそぎ詣でのころも兼家の心は「おいらか」であった。⑤の母の死に際しても、兼家は、「いとあはれに、心ざしあるやうに見え」たのであり、⑥の一周忌に兼家は登場しないが、⑦の葵祭のころの記述には、正妻時姫に対してすら、兼家の愛に関しては、優越感の持ちえたことが示唆されている。

兼家の登場しない⑧⑨においても、「かうはかなき身の上も申さむ」としており、兼家の存在は色濃く投影されているといえる。

⑩の初瀬詣では、動機の内発性においてのみならず、その経過においても、中巻の物語でにおける、作者と兼家の関わり方の原型をなすものと言えるだろう。兼家が時姫に義理立てする。彼女はすねて物語でに出、「これよりも深くと思へば、帰らむ日を、えこそ聞え定めぬ」と、出家のポーズを示す。兼家は驚いて後を追ひ、「帰る日

を心のうちに数へつつ」と愛情を示す。作者は機嫌をなおしてもどる。「近う花咲き実成るまでになりける日ごろよ」という従者のことばは、同時に彼女の心境でもあったろう。気をよくした彼女は⑩の、時姫方の御禊の女御代の準備も手伝い、自分も見物に出て、「今めかし」とその豪華さをたたえている。

以上を要するに、上巻にあっては、作者の物語でに対して、兼家がこれに登場している限りにおいては、彼は、夫としての彼女への愛情を十分示しており、両者は、物語での結果、そのつながりを深めたいといえるのである。(注2)

(中巻) ⑫の唐崎拔の動機が、夫の長い夜離れに耐えかねてのものであることは前述した。が、別の理由として、⑩の初瀬詣での、幸いな結末が、彼女に、「今度もそうなれば」と思わせたりすることも想像できる。が、⑫では結果は逆で、留守中訪れた兼家は「なにとかこの心(物語での志)ありつる。あしうも来にけるかな」と苦々しいことばを投げつけて去ったのである。⑬に至っては、兼家は姿を見せることもしない。彼の、妻のこれらの物語でに対する否定的感情は、翌月はじめ、にわかに来て、侍女たちに演じた狂態にも示されているといえるだろう。⑭の物語では、供奉の兼家を世人が、「いでなほ人にすぐれ給へりかし」と賞するにつけても、「いとど物のみすべなし」と、時めく夫への誇りと、その夫に顧みられぬ哀しみとの二つに引き裂かれた思いに作者を苛むことになる。かくて⑮では、彼女はついに、家出同然の西山行きに、再出発の手がかりを得ようとする。体面上兼家は強引に連れもどすが、事態はその後も好転するわけ

ではない。⑯の初瀬詣での準備に際しても、兼家は、道綱母の物語では、拗ねて甘えて、自分に関心をひきつけようとする計算づくの演技と見て、敵意に近いものを抱いているかのごとくである。上巻の物語でのハッピー・エンドに終わるプロセスと対照的だと言ってよい。

作者も、結局それを理解せざるをえなくなる。⑯のあとで、兼家が珍しくも迎えに来てくれたのを、「昔のこと(⑩の初瀬詣での時のこと)をたとしへなく思ひ出づらむとなるべし」と、久々に素直な心境を示している。遠ざかれば求め、近づけば拒む——こうした、中巻の、不幸な夫婦仲にも、諦念に支えられた平安とも言えるものが訪れていたことをそれは示すものであろう。

(下巻) かくて、下巻の、数多い物語での記録には、冒頭部分に兼家の姿が仄見えるのを除けば、全くといってよいほど、彼の登場はなされない。作者にとって、物語では、すでに、夫を誘う、屈折した媚態としての意味を喪失していたと考えられるのである。

四

次に、もう一つの角度から、『蜻蛉日記』物語での記の分析を試みたい。『蜻蛉日記』で多く焦点が結ばれているのは、夫兼家の像であることは言うをまたないが、しかし、その他の近親者についても随時言及はなされ、それらはそれらで作者の、それぞれの時点にあっての人間把握を反映しているといえる。その中でまず、作者の、父、母、姉妹など、肉親に関して、どのような言及がなされているかを通観してみようと思う。

(上巻) この中で注目しに価するのは、⑤の母の死の前後における記

述である。母の死に衝撃を受けるのは、人の子として正常な反応だが、「遅れじ遅れじとまど」「い、「足手などただすくみにすくみて絶え入るやうにす」と死を思い、硬直症状を呈し、かたみの衣をみては「絶え入る心ち」をし、⑥でも一周忌に僧の話を聞いては「ものおぼえずなりて、のちのことどもおぼえずなりぬ」と失神するという事態が頻発するというのは、もはや異常な反応といふべきだろう。

類似した描写は、結婚後まもない、父の離京に際しても存する。

「いと心細く悲しきこと、物にも似ず」、置き文をも「しばしは見むころもな」かったのである。姉との別れに際しても、兼家が「なごかくまがまがしく」と「とがむるまで、いみじう泣かる」のであった。いずれの場合にも、兼家は、夫としては誠意を尽しているといえるのだが、作者はその誠意にすがろうとせず、おのれひとりの悲嘆の中に自閉している点で軌を一にしている。

要するに、上巻にあっては、彼女の、失神に近いような激情は、常に肉親との別離（生別、死別を問わず）において発現しているものであり、それは彼女のその点での生存の根が、肉親において在ったことを裏付けているものであろう。

つとに清水文雄氏が、『蜻蛉日記』においては、「『たのもしき人』『たのもし人』『たのむ人』『たのもしきものに思ふ人』等の語はすべて親乃至兄弟に対して与へられた名称」であり、「夫たる兼家は一語もこの意味の言葉で呼ばれてゐない」と『女流日記』中で指摘されているのも、その間の事情を別方向から示す事実だといえよう。

（中巻）中巻における彼女の精神のドラマが、ひとえに兼家への愛憎に起因していることはすでに述べた。したがって、上巻に比して肉

親の登場する件数は乏しく、登場しても、多くは、兼家と作者の愛憎劇の脇役として登場している。⑫、⑬の物語でにおける作者の妹や、⑭での父倫寧の役割はそれを示す。注目したいのは、先にふれた激情の表現は上巻よりもさらに多いのであるが、それはほとんどが夫兼家に向けられたものであり、肉親に対するものは存在しないことである。とりわけ、その種の表現は⑬の石山詣でに集中しており、出でたのははじめから「死人も臥せりと見聞けど、恐しくもあらず」とい逆上ぶりで、怨恨と悲哀にのたうったあげく、夜は「伏しまろびぞ泣か」れて、「涙の限りをぞ尽くし果」てたのであった。この種の激情表現ともいふべきものが、⑭の物語での記には見られず、以後の下巻にも跡を絶つことは、作者の精神史からしても、また、作品の成立過程からしても興味ある事実だといえる。

（下巻）下巻の物語での記にはほとんど兼家の姿が見られなくなることは先にもふれたが、長上の肉親の姿も見えず、⑲や⑳に子道綱や養女の姿も散見するが、劇的ではなく、全体として、物語では作品のテーマと深く相関するものではなくなくなったことが知られるのである。

ただ一つ、例外的に象徴的とも言える記述は、最終の㉘の記述であり、賀茂祭に際して、威風四辺を庄する兼家と「きらきらしう見え」る「我が思ふ人」道綱、そして兼家の好意で、特に召されて酒などついで貰っている父倫寧の配置図である。

これは、『蜻蛉日記』巻末部における、作者の精神の風景の構図としても読みとれるものであろう。

もはや遠い貴人となった夫兼家と、その威勢にすがって栄達を期待すべき子道綱——その子が、今は、「思ふ人」であり「頼みの人」な

のである。かつての「頼もし人」たる父は、すでに公人としての將來はなく、貴門の女婿からのふるまい酒に「片時ばかりや、ゆく心もありけん」と娘に評される好々爺となり果てている。

上巻は、倫寧女としての意識から脱出しえず、中巻になって、必死に、ただひとりの兼家妻たらんと悶えたものの、それはついに諦める他なくて、今は道綱母として、子にすべてを託する他なくなった作者の眼のありようをも、逆に想像できる、そういう象徴的風景でもありそうなのである。

五

ところで、前述したことも関連するが、ひとり子道綱に対する『蜻蛉日記』の叙述の変遷にも、作者の意識の歩みは、別の形でみてとることができる。

(上巻) 上巻の物語での記においては、道綱が話題とされることは必ずしも多くない。他の理由もあろうが、誕生の記事が「直もあらぬことありて、春夏悩み暮らして、八月ごもりに、とかう物しつ」と簡単に過ぎるのは、子への愛情のうすさも理由と考えて不都合はなさそうである。事実、上巻においては、道綱は、ほとんど兼家との愛の媒介物としてのみ登場しているときえ言いうるのである。

⑤で、「幼き子」を引き寄せて、夫への遺書を託しているのはその例だが、「死なむと思へど、生くる人ぞつらきや」と、道綱の存在が自分を死なせないのだとしている。この思考法は、42頁の長歌で「まつのみどりご」によせて「かひもあらぬ身を永らえて」としたり96頁の遺書で、「塵ばかり惜し」くない身だが「幼き人」を思えばい

みじい、とし、⑬の石山詣でも、「死ぬるたばかりをもせばや」と思っても、「絆はだ(道綱)おぼえて、恋しう愛し」としている所にも共通している。作者が死を思うのは、常に兼家との危機においてであるが、内なる生への執着は、決して真実の死に彼女を追いつめはしない。そのとき、彼女をこの世に呼びもどす表向きの理由が、道綱への不憫さなのだ。だが、この子への愛は危機においてのみ表われ、平常は影をひそめているのが特徴なのである。

道綱にかぎらず、上、中巻において、子どもの存在は、作者にとつて、常に、兼家との関連の上で意識されていた。町の小路の女の子にも、時姫への劣等感を「子どもあまたありと聞く所」(31頁)として表現した箇所にも、自己を「あまたの子など持たらぬを、かくものはなくて」(54頁)と諦観したところにも、それは表われている。

以上を顧みるに、とりわけ上巻にあって、彼女は親子の情といったものより、夫との感情に、その関心を集中させていた人という印象が強いのである。

(中巻) 前掲物語で表には、作者の物語ででないので掲げなかったが、中巻はじめの100頁で、兼家と道綱が御岳に詣で、道綱が最初に帰って、父の来宅を告げているのは、中巻の世界の開幕を告げるかのごとくで印象的である。この巻では、少年は、父母のやりとりにおける重要な役どころを次第に占めつつあるといえる。105頁の「内裏の賭弓」、118頁の「鷹放ち」、129頁の「大嘗会」の記事なども、その例である。

その役割は、⑮の西山籠りにあつては、いちだんと重要性を増し、

籠ろうとする母とさせまいとする父の間を、度々行き来しては泣き顔になつてゐる子に対して、作者は「これを頼もし人にてある」と、かつて用いなかったことばを、子に与えるまでに至つてゐる。

(下巻) 下巻において主役的に位置づけられるのは、子道綱と、養女である兼忠女の子とである。(注3) ②の賀茂詣では、道綱と大和守娘の交際が描かれ、③の山寺詣では、養女に対し「あはれなる人の、身に添ひて見るぞ、我が苦しさも紛るばかり愛しうおぼえける」と、従来自己中心のだったという他ない対人態度の轉換を實証するような口ぶりも示している。物語での記から外へ目をやるなら、下巻において、最も多く叙述があてられているのは、道綱と大和守娘、養女と右馬頭遠度という二組の交渉といつてよく、作者はここでは、妻としての心情から、母としてのそれへと、叙述の視座を変えていることが知られるのである。

他に、対人意識という側面では、近親者以外の人々への意識——いわば対社会意識といふべきものの様相をも、あわせて瞥見しておきたい。

注意したいのは、⑩の初瀬詣で、「下衆近なる心ちして入り劣りしてぞおぼゆる」という貴族女性としての意識をもつ一方、「下衆」どもが、袖・梨を食べているのを「あはれに見ゆ」とし、庶民たちにも「おのがじしは思ふことこそはあらめ」とし、「乞食ども」をも「いとかなし」とし、盲目の者たちの祈りに、「あはれにて、ただ涙のみぞこぼるる」としてゐるあたりは、平安女流貴族の文学にはまれな、下層階級の者への共感——とまではいえぬまでも、少くとも、浅からぬ関心を示していることである。上巻巻末の村上帝崩御、佐理

夫妻出家に関する記述や、中巻冒頭の高明配流のそれにも見られる没落者たちへの同情とも思いあわせ、こうしたところに、おそらく、上層貴族たる夫兼家へ抱かざるをえない、身分下の倫寧女としての自己の劣等感に似たものが作用していることを私は推測させられるのである。(注4)

してみれば、中巻の、⑬の石山詣での所で、若狭守の一行が、彼女の身分を知らず「ののしりて来」たことに対しては、「明け暮れ、跪きありく者の、かうて行くにこそはあめれと思ふにも、胸裂くる心ち」したという記述にも、作者の潜在意識ははしなくも露呈していると見えそうである。没落者や弱者へは惜しみない同情を寄せても、成り上り者の驕慢には、激怒せざるをえない心理——それは、彼女自身が成り上り者として、貴人たる夫にたえず圧迫感をうけている妻の、いわば近親憎悪にも似た思いではなかつたらうか。

下巻で社会的意識の表現とみられるものはあまりないが、養女に言い寄る右馬頭を、結果的には、翻弄した経緯には、女としての復讐のみならず、社会的な復讐のようなものをも、養女を俳優として演出した作者の悪意がありそうだとすれば、いささか深読みになりすぎるかもしれないのだが。

六

最後に、物語での記である以上、当然予想される宗教的意識の記述と、その変容について考えてみたい。もっとも、宗教的現象については多く描かれていても、それと関わる意識についてはあまり多くふれられないのも、『蜻蛉日記』の特色だと思われるが、したがって

宗教的意識を検討するに際しては、物語での記以外の部分をも適宜参看することとなる。

(上巻) ここでの物語での記は、前述したように、大部分が、内発的動機をもたない、祈禱等のための物語であって、その当然の結果であろうが、宗教的意識は、未熟で現世利益的なものが支配的である。③の山寺詣では病氣治療のためなのだが、「日ごろ悩まうてしはぶきなど、いたうせらるるを、靈の氣にやあらむ、加持も試みむ、せばどころの、わりなく暑きころなるを」と避暑も兼ねているごときその好例である。

ただ、⑤の母の死は、「道心を得べき折よき機会」(注5)であったろうが、これへの作者の反応は、「ものおぼえずなりて」という、むしろ拒否反応的なものであり、兼家の病いなども、同様に、道心獲得の機でありえたはずだが、反応は同じく、「ものおぼえずなりて」「ただ泣きにのみ泣く」だけであった。日記の記述に見るかぎり、無常を自覚させるような出来事が生じても、それは作者を無常の教えへと導く結果にはなっていないのである。

上巻から、他に宗教的意識に関する記述を拾うなら、41頁の長歌の一節に「いかなる罪か重からん」とあり、45頁に「わが宿世の怠りにこそあめれ」などあるくらいだが、それはただ、兼家の愛の薄さの原因として言われているにとどまり、愛そのもの、生そのものが問われているわけではない。しかも、これらのことが述べられた時期は、町の小路の女への、すさまじい嫉妬の念に身を焼いていたころであり、作者にあっては、宗教的表現すら、兼家との愛欲にからまっという、ということのみ、ここでは指摘すれば足りよう。

(中巻) いま私は、上巻のごくわずかな宗教的表現が、兼家との愛欲に関わっていることを指摘したが、中巻では、作者の激情を表現した箇所がとりわけ多いという、先に言及した事実を、ここで、あわせ想起したい。この激情的表現には、わけても⑬の石山詣で見られるように、「身のあるやうを仏に申すにも、涙に咽ぶばかりにて、いひもやられず」とか、「思ひ入りておこなふ心ち、ものおぼえず」とか「御堂にて、よろづ申し、泣き明かして」とか、一見、はげしい宗教的意識の発現とみられるものも多いのだが、はたして、これらは、単なる道心の発露とのみ解されるものであろうか。

同じ、石山詣での条の中で、「死人も恐しくもあらず」「ただ涙ぞこぼるる」「胸裂くる心ちす」「ふしまろびぞなかるる」「はてはあきれてぞゐたる」「なみだのかぎりをつくしはつる」と、全く同質の激情表現は頻出しており、それは兼家や、おそらく兼家との意識に深く関わって若狭守に、向けられた、怒りや悲しみの心情であるのだが、あれとこれとの表現の類似は、おそらく心的内容の類似でもある、と私は考えずにいられないのである。

先述の、激情的な、仏への祈念の果てに見た夢が、周知の、法師が膝に水をかける夢で、岡一男氏が、フロイト説に従い、この夢を性的なものとして解されたのは(注6)おそらく正しくて、作者の、仏への切ない呼びかけは、実は、形を変えた夫兼家への渴愛の叫びに他ならなかった、と私は見るものである。

同様の激情の高揚は、⑬の石山詣でと、⑮の西山籠りとをむすぶ間にも数多く見受けられ、「切り砕く心ち」(126頁)、「胸うちつぶれて」(129頁)、「沸きたぎる心」(130頁)、「胸のほむら」(131

頁)、「胸つぶる」(132頁)、「涙の浮かぬ時なし」(133頁)「心を切り砕く心ちす」(137頁)と、ほとんど毎頁にわたる。

こうした状態を経て、ふたたび「蛇ありきて肝を食む」(139頁)という、おそらく男根願望的な、性的な夢と、「頭をとりおろして額を分く」という明らかに出家願望的な、宗教的な夢とを、日をへだてずして見、印象深いこととして記録することになるのであり、彼女における宗教的意識と、性的意識との密接な相関は、ここからも明らかだと見えよう。(注7)

したがって、中巻における彼女の宗教的意識は、その兼家への意識に照応するかのごとく、不安定であり、反撥と執着のくり返しという特徴を持っているようである。

一方では、「行基菩薩は、ゆく末の人のためにこそ、実なる木は植ゑ給ひけれ」(135頁)という、あるいは、道心の契機たりえたかもしれぬことばに接しても、「ありし所とて見む人も見よかし」と、自己中心的にしか反応しえず、先の、蛇や出家の夢についても、「かかる人、夢をも、用ゐるべしや、用ゐるまじやと定めよとなり」と、宗教には懐疑的な言句を以てしているのである。(注8)

他方、先の夢の直前の条では、「とくしなさせ給ひて、菩提かなへ給へ」と泣きながら祈り、かつて、女性の修道を「もどきし心」を悔いる言動にも出ているのである。

それはさながら、兼家を求めて「ぬる所にもあらで夜あかし」(131頁)つつ、彼が来るや、「石木のごととして明か」(133頁)すといふ、去れば求め、来れば拒むという、彼女がしばしばくり返すところの、アンビヴァレントな態度のパターンと軌を一にするものである。

自立した意識を持ちつつ、現実に自立は不可能であるという、矛盾し、不安定な、「かげろふ」の如き生存の条件が、彼女の性的意識と共に、宗教的意識をも不幸に規定していた、とこれを要約することもできよう。

こうした泥沼のような日々を清算する試みとして、おそらく⑮の西山籠りはなされたのであった。

西山籠り以降の記事の変容は、この長期の参籠による作者の意識の浄化のゆえとも見られるし、また、他ならぬ『蜻蛉日記』執筆によるカタルシス発散のゆえとも見られているが、(注9)おそらく両方の理由が正しいと私は考える。

この物語でを転機として、作者の心的姿勢には、従来になかった自省的様相が色濃くなりまわっていることが明かに指摘できるのである。かつて、兼家が遠ざかるのを、「我ためにしもあらじ、心の本性にやありけむ」(130頁)と他者を問責していた作者が、虚勢にもせよ、⑯では「人やりならぬわざなれば、問ひとぶらはぬ人ありとも、ゆめにつらくなど思ふべきならねば、いと心安く」とし、また「人やりにもあらねば」とくり返していることにもそれは知れる。

また、昔縁起でもないことと仏道帰依を非難した「さまに、一つたがはずおぼゆ」(131頁)と自らを省み、「とどきまかくさまに言ひなさるれど、我が心は、つれなくなむありける」(134頁)と自己を客観視するゆとりも生じている。

(下巻)爾後は、激情も、宗教的意識もひとしなみに影をひそめ、物語でに誘われると、「石山の仏の心を、まづ見果てて」(136頁)と霊験を確かめる気もちが生じ、夢ときを「をこなるべきこと」

(189頁)とし、「身をば、仏も、いかがし給はむ。ただ、今は『この大
夫を人々しくてあらせ給へ』」(209頁)と、わが子のことだけを祈
り「『盆の事のふみ』など、さまざまに嘆く」(212頁)と仏事をも経
済的見地からとらえる視点など、中巻には見られなかった、「醒めた
眼」を看取することができるのである。

人生の経験と、年齢の生理が、彼女を、夫への愛執からようやく解
放しつつあったあかしと、これを見ることもできよう。
作者の宗教的意識が、常に、兼家への意識と照応して、変遷してい
ることが、以上の分析からも読みとられうるであろう。

物語での記を中心としての『蜻蛉日記』の内容分析表(底本「角川文庫」本)

事項	上	中	下
① 全頁数 (記述年数)	76 頁 (15年間)	92 頁 (3年間)	86 頁 (3年間)
② 記述物語で回数	11	5	12
③ 物語での記述頁数 ※	19	40	12
④ 一回当り平均記述頁数	2頁以下	約8頁	1頁以下
⑤ 物語で記事の全頁に占める%	25%以下 (19/76)	約44% (40/92)	14%以下 (12/86)
⑥ 物語での動機	おおむね実益的	おおむね、兼家への反撥が第一動機	おおむね、「しのびて」又は「いざ なはれて」
⑦ それへの兼家の態度	皆愛情あり	おおむね反撥的	おおむね、無関係
⑧ 物語での結果	兼家とのつながり深まる	兼家とますます反撥、離反	おおむね、主題と無関係
⑨ 肉親への意識	父、母、姉との別れに激情を示す	無関心、時々兼家と関わって言及	言及はまれ
⑩ 道綱への意識	兼家との愛の媒介物として	兼家との交渉の主要な役として	主たる関心の対象として
⑪ 社会への意識	庶民や没落者への共感的関心あり	成り上り者への怒りあり	言及はまれ
⑫ 激情の動機	肉親との別離において	兼家への不満や怒りにおいて	激情表現なし
⑬ 宗教的意識	未熟で現世利益的なもの	兼家への愛欲と深く関わり、不安定	現実化し、うすれる
⑭ 以上を総合しての作者の精神的 位置づけ	倫寧女	兼家妻	道綱母

※一頁未満のものも一頁として計算。

むすび

以上、様々の角度から、『蜻蛉日記』に表われた作者道綱母の物語

での記を中心としての、作者の意識の、各巻における変遷の状態を探
ってきた。如上の分析によって、上・中・下三巻のそれぞれが、かな
り明白な性格の相違を持つことは、明らかにしえたと思う。そして、

作者の意識の変遷の相を、その、家族内における精神的な位置付けを示す一語でそれぞれ要約するとすれば、上巻は倫寧女であり、中巻は兼家妻であり、下巻は道綱母である、とすることも、以上の分析の結果、言い得ることのように私には思われる。

この結論の由来を明らかにするために、これまで述べたつた、物詣で表を中心としての『蜻蛉日記』の分析の結果を、あらためて、前表のように図式化し、掲げることにした。

筆者は、かねてから、文学と宗教的事象との関わりに関心を抱いてきたもので、本稿の分析も、その一環として試みたものだが、王朝女流文学の分野に関しては、従来、専門的考察を進めてきたものではないので、小稿にも修正さるべき点が多いと思われる。

ここでは一応結論のみを提示して、先学のご教示を仰ぎたいと考えている次第である。(注10)

注

注1 底本は柿本奨氏校注「角川文庫」本に拠った。本文や解釈は、一、二の例外を除き、原則として右の底本に基づいて論を進めた。

なお、表の上巻①②を物語でと見たのは、川口久雄氏校注「古典文学大系」本の説に従った。

注2 清水好子氏が、『蜻蛉日記』は「むしろ、幸福の記録、愛の記録」であり「上巻がことにそうである」とされているのは、この辺の分析結果と照合して興味深い指摘である。(「日記文学の文体」・「解釈と鑑賞」昭36・2)

注3 菊田茂男氏は、下巻では、道綱および養女に関する記事が「九割近く」を占めているとされている。(「蜻蛉日記の世界」・「平安朝日記」)

注4 秋山虔氏は、この辺の作者の心理を、「わが夫とは対立的立場にあって敗れ去る人の不幸を、わが共感の対象とし」たものと見られている。

(『蜻蛉日記』)

注5 関根慶子氏(「女流日記作者の道心」・「解釈と鑑賞」昭23・3)

注6 『道綱母』

注7 ジョルジュ・バタイユの『文学と悪』や、スーザン・ソントアグの『ポルノグラフィ的想像力』などにも宗教的意識と性的意識の密接な相関が説かれている。

注8 西郷信綱氏は、この作者の夢への態度を、「懐疑ではなく一種の判断停止」と見、「人生の指針として深く夢を信じた神話時代が過ぎさり」、「それを救済すべき中世の宗教的ドグマがまだ形をなさない過渡期の平安中期」という時代に関連づけられている。(『古代人と夢』)

注9 藤岡作太郎・喜多義勇氏の説をふまえた秋山虔氏『蜻蛉日記』他の説に従い、西山籠りに執筆の起点があると考えたい。

注10 前掲した諸著の他、『国語国文学研究史大成・平安日記』や『日本文学研究資料叢書・平安朝日記』に所収の諸論、その他『日本古典文学大系』本『蜻蛉日記全注釈』本等の解説類を参看し、また、菊田茂男氏「蜻蛉日記における宗教的意識」・「秋田大学学芸学部研究紀要」(昭29・3)他、関係諸雑誌の諸論文を参照させて頂いたことをもあわせて付記しておく。